

淡海

十九井

和書門			
八六三二	函	架	冊
一九二四	冊	架	冊
一四	冊	架	冊

内閣文庫		
和書	八六三二	函架冊
和書	一九二四	冊架冊
和書	一四	冊架冊

内閣文庫		
番號	和	8632
冊數	14	(10)
函號	150	91



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



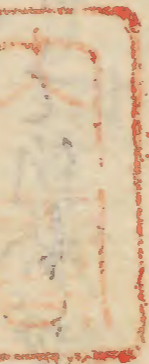
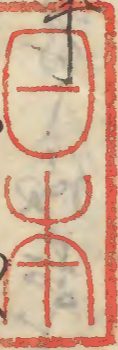
讀梅方十九

明治十一年編

寛文六

談海才十九

寛文六丙午年



一今年正月七日大坂志之場の火あり千夜焼法に
 又明音八日戌別領城町の火あり同日巳刻進焼
 中の右の高野屋公千九百廿三軒焼失早烈風に
 飛火の四通の五通の焼通の右の外物の家の
 西の御控の形所の中の所の出の侍の倉の拾八軒焼失何
 已の所の子の致の焼法の中の右の越の山の因の情の任
 進の天

一今年四月不交名施の傳書配流は作付

一今年五月廿二日に府光の御あり東の長(二年) 形如人

一今年五月十日 御あり府光の御あり
一高七カ八子七言在案 丹後守(徳) 京極丹後守(高) 國
右の國進退し先松又丹後守(高) 改義(三年) 四月
廿二日 隠居の御あり 御あり 御あり 御あり 御あり
谷の御あり 御あり 御あり 御あり 御あり 御あり
又子の御あり 御あり 御あり 御あり 御あり 御あり
丹後守の御あり 御あり 御あり 御あり 御あり 御あり
御あり 御あり 御あり 御あり 御あり 御あり

謹而云上

- 一 於に(人) 對國持(大) 名(我) 勝(後) (事) 附(宗) 代(供) 念
- 一 於(殿) 申(度) 死(御) (事) 令(仍) 死(罪) (事)
- 一 知(仍) 未(進) 在(一) 百(性) 法(是) 年(高) 利(一) 八(本) (事) 御(心)
- 一 也(亡) 所(有) (一) 事
- 一 百(性) 未(を) (一) 刻(是) 悔(申) 召(等) (中) 付(者) (事) 御(心)
- 一 家(智) 未(後) (以) 未(事) 法(法) (事) 一(切) 念(力) (を) (一) 自(憶) 恐
- 一 以(て) 在(任) (人) 為(後) (事)
- 一 一(門) 中(也) 或(ハ) 不(和) 式(不) 通(一) (事)
- 一 家(未) 後(職) 一(切) 不(仍) 死(利) (事) 妻(子) 願(因) (一) 不(念)

友及親戚の事

一家中扶持方の利害を分る事

惣取申を考へて申す事

賣入の事

一箇井田備分の事

一所を分る事

一代及那奉の進退を分る事

一取及人の事

右の條より進退を分る事

寛文二年四月

宗極安智歟

三改判

進上

法奉行所

年々の中

右通相徳の法老申の法被見之入る如く別

道より申す可なり丹後守也

河井修理左衛門忠定宛に指申す評定所

各別座より上迄の御事候但進上御事

申す御事候申す御事候申す御事候

申す御事候申す御事候申す御事候

元

一昨日候又安智方の御事候申す御事候

春丹後守上州所^レ至^レ度^レ申^レ状^レ如^レ前
 後新撰^レ父子^レ格^レ不^レ備^レ事^レ
 一丹後守家督未^レ續^レ已^レ生^レ又^レ安智^レ討^レ不^レ孝^レの
 品^レ不^レ之^レ格^レ中^レ 于^レ上^レ一^レ顆^レ下^レ南^レ和^レ不^レ通^レ事^レ
 一家^レ中^レ之^レ諸^レ侍^レ若^レ便^レ同^レ之^レ町^レ人^レ百姓^レ令^レ困^レ窮^レ支^レ
 右^レ之^レ條^レ不^レ死^レ也^レ相^レ以^レ不^レ候^レの^レ相^レ子^レ同^レ之^レ條^レ若^レ
 安^レ公^レ之^レ如^レ伊^レ若^レ免^レの^レ外^レ今^レ般^レ安^レ智^レより^レ申^レ付^レ上^レ
 一^レ身^レ与^レ便^レ地^レ之^レ上^レ之^レ丹^レ後^レ守^レ南^レ楚^レ大^レ孫^レ安^レ智^レ上^レ
 七^レ為^レ堂^レ上^レ之^レ以^レ以^レ成^レ伊^レ氏^レの^レ上^レ
 五月三日

右^レ之^レ通^レ能^レ詳^レ是^レ所^レ以^レ申^レ上^レ系^レ山^レ嶽^レ与^レ伊^レ氏^レ之^レ死^レ除
 安^レ房^レ与^レ伊^レ氏^レ村^レ被^レ長^レ門^レ与^レ海^レ也^レ出^レ陽^レ事^レ所^レ
 中^レ之^レ身^レ列^レ在^レ丹^レ後^レ守^レ之^レ荒^レ其^レ上^レ之^レ門^レ及^レ之^レ選
 御^レ也

一丹後守子共以成伊氏

二言 万去 七去

三言 妻之助 妾

四言 松之助

五言 女子二人

一右安智母七池田三左之輝政之孫也

松平新左衛門

松平相模守

伊達遠江守

松平龜次郎

一丹後守之國ハ松平陸奥守政宗ノ御年也

一丹後守也信長文字ハ出掛指トシテ年迄ニ信長

トシテ初自外金子ノ内丹後守ハ女百女也信長

女百女を合テトシテ

一高國ノ城地丹後守信長トシテ上使申^{此條目}

條々

一萬事法度ノ妙堅可申付事

一喧嘩口論停止シ迄有違犯ノ様ト双方可合

一請得方一令行様ト其様可申重知事

一竹木一切不可伐採事^{附石一揮費根籍事}

一家中ノ事我共認念具一役ノ身心事

一家僕ノ儀亦洋代方可為之儀相討知事

一在可守付合申下知知事

寛文六年六月十日

上使申

一下知知事

條々

一系極丹後守信長ノ御年也ト名届付事頃地ト云々

南於大船左更^{此外}ト迄物也丹後守信長ノ御年也

為徒也申ハ松平憲杖也松平憲杖ハ御年也

与在在当水谷左原丸九鬼在門書以之可
及之上本丸之形跡有二九之形跡以三九之形跡
左原丸在門書法也 波動仕丹後書家生城下
門掛之上本丸二九之左原丸三九之在門書法也
之形跡書之形跡伊勢書之形跡 可之存是事
一 市中之形跡書之形跡所之町人百姓未見中可
市中之事

一 幸仕原先親之流文 在形跡附在之市本松可
上之形跡

一 丹後書形跡之在形跡地能在于市本松之形跡

一 給人城下門掛之儀 上仕原門付之形跡
及之形跡二十日切事

所給人二之形跡 在之形跡中 幸士原 醫之
上心形跡也之指是也 是是事 形跡相形也先
之形跡 是遠形跡也之形跡 是台形跡 是流文
可也之形跡

一 原地 佛之形跡 以形跡在 合丸之形跡 長形跡 之形跡 何
合甚之形跡 是之形跡 是之形跡 是之形跡 是之形跡
是之形跡 是之形跡 是之形跡 是之形跡 是之形跡
是之形跡 是之形跡 是之形跡 是之形跡 是之形跡

一 形跡 佛之形跡 是之形跡 是之形跡 是之形跡 是之形跡
是之形跡 是之形跡 是之形跡 是之形跡 是之形跡

附年貢未進可并換年
一車進之此は信公男女に依主徒に後次寄多也
但五二十年上可為信代事
附信代子前
主公男女に其務に信代
福し事

一信物も可為院文次寄事
右し陸之依作執達如解

寛文六年五月十日

内膳正
但馬守
大和守

上使申
至使言
其後言
雅重次

一右し時上使のまゝに大徳元同時に山内村黒河
丹波寺能辨法衣の而尾夏三信之
一付以丹波寺のまゝに家老毎家中に法生相傳て
中を松平國公は批判を以てて口説と流し時上は
の布衣を遠く世の人の批判に以てて一急用國
中の士卒を城に招き申て改換して觸るは其
何の事色地集り而して愚念を述べて一より付

我城同心之其有在分也其主敵以保其守中
老一りの文々如丸

讀之上は信物も今度丹後之領地物も石を家
老共我城仕之所と城内に家中に儀呼寄其後
仕之丹後守軍守不事とて城と相違中其家
の面もあつて義守に申すに楊と共存其丹
後守任主思ふに度山と家老共連る疎節之儀
為在仕之友保仕之守但我守中其有在仕令
と作付の所の家老共守新造之世同く介
新成の守右に台相儀の得り而くし候七村

天下様より我城に收仕度候は自然一意破言同心
杯仕之る以候之思案仕中上は之を全守候口由に
神手迄初同心不仕之志候侍候

二月十日

- 東原之侍 川橋七左衛門
- 吉田三左衛門 宋園八左衛門
- 中村三左衛門 吉田四三左衛門
- 井上七左衛門 吉田利三左衛門
- 井上七左衛門 岩倉源三左衛門
- 多紀九左衛門 三田源三左衛門
- 遠及助左衛門 三木源三左衛門

右是判之印因心一若教多法在公以在是神心在
加判不仕心以上

松平主殿取扱

小出伊勢守

小出伊勢守

高木忠兵衛 田中安兵衛

田中吉兵衛 田中平兵衛

川上信兵衛 田中助兵衛

子田吉兵衛 今井兵衛

大田吉兵衛

一折多利以由一 高城可仕中合公若

高合主殿取扱

伊木七郎重

磯矢助右衛門

高合友一重

沢 彦兵衛

中江源三郎

磯矢三郎重

徳谷源三郎

不破松三郎

沢 兵衛

中江氏那

高合兵衛

沢 兵衛

伊木又兵衛

磯谷源三郎

産田源三郎

川原兵衛

小幡市兵衛

了場甚女名傳	二百石	西川又右衛門	二百石
西根甚女名傳	二百石	伊藤又右衛門	二百石
不破次左衛門	二百石	井上又右衛門	二百石
長光次左衛門	二百石	長田又右衛門	二百石
可児左衛門	二百石	小嶋又右衛門	二百石
小嶋七右衛門	二百石	向江十左衛門	二百石
寺尾源三郎	二百石	米村左衛門	二百石
河合源五郎	二百石	田中甚左衛門	二百石
板根安左衛門	二百石	了場甚左衛門	二百石
福田傳三郎	二百石		

石破中左衛門	二百石	西川傳左衛門	二百石
早稲下左衛門	二百石	荒智源左衛門	二百石
三田金左衛門	二百石	内保源左衛門	二百石
大嶋依次郎	二百石	大嶋左衛門	二百石
小嶋勘右衛門	二百石	遠及七左衛門	二百石
平賀米左衛門	二百石	三田村使左衛門	二百石
花本友左衛門	二百石	長多村惣左衛門	二百石
田中甚右衛門	二百石	大橋平左衛門	二百石
下村源七郎	二百石	石破安左衛門	二百石
以上右様五人			

右介孫城同公令一又上使元中上王狀也
南而中上精修之者教多其一以和之西塚園所
或之江戶系大坂之孫城之侍共之也想令
百拾二人社給知取也
一丹後守家米孫城之内家南交之古田田原也
三田村徳有之支使之福智山中也以上宛危但
福智山中松平主殿以順地之

以上

今度丹後守三調法也其由改易以作付就史也夜
去之矣徑宛及進家老共中上之越之云津城地也法
取之也若格由百由越也乃兼之物也其云之也
丹後守也其附不格越也其由也城地也其付也其由也
城也其後也其由也其由也其由也其由也其由也其由也
仕也其由也其由也其由也其由也其由也其由也其由也
今主程外伊木七也其由也其由也其由也其由也其由也
助在也其由也其由也其由也其由也其由也其由也其由也
一平後丹後守也其由也其由也其由也其由也其由也其由也
御上使也其由也其由也其由也其由也其由也其由也其由也
及使景也其由也其由也其由也其由也其由也其由也其由也

文三六

上使下使尻市を以てお家中兵町在に述渡動
不仕極急度と申付公上使於此迄も城を
復さざる申上は既河原家子連川渡りお申
物尤今度し仕合我亦石川法友家中可致
宰浪し不復た申上は侍申しくお申お申上

五月七日

系丹後守由判

河原家子連川渡りお申
伊本七郎在りお申
中に民戸お申
破谷助右衛門お申

右に申す如く丹後守由判に河原家子連川渡りお申
と以て申上殿に及伊勢守及水口上と申上と申
上殿の申上は但五月十七日申上と申

以上

左に申す如く丹後守由判に河原家子連川渡りお申
丹後守由判に申上と申上は既河原家子連川渡りお申
及上使の申上は既河原家子連川渡りお申
切後可仕し申上と申上は既河原家子連川渡りお申
上使の申上は既河原家子連川渡りお申
上使の申上は既河原家子連川渡りお申
上使の申上は既河原家子連川渡りお申
上使の申上は既河原家子連川渡りお申

次牙城相後... 此中上云

一上使危城... 勘定危川... 金銀...

一金中判二万八千七百七十五文
一太判五拾枚

一金のまじり... 一銀中判二万...

一銀河大小...

一唐吹一百...

一銀八拾八...

一金中判千四百九...

一銀七拾七...

一金中判千...

一銀七拾二...

一銀百四拾八...

金令... 右是... 此所...

一 浪二百三拾と費四百也

右是ハ家中軍用浪とて資取所也

一 浪九拾六費百九拾也

右是ハ家中善法浪と名付テ資取所也

右家中はトシ年在之知行高何種トシリ也

毎年お取之月ヲ押カ浪全浪之右外中トモ

浪在之ハ年在之知行高何種トシリ也

年知今度 公儀活動定流ハ以テ後人トモ

全浪之資取知不中ハ也

一 公儀丹後堂太子御東面ハ以テ今浪如也

是也

一 全十判五百也

丹後堂ハ

一 同 二百也

近江堂ハ

一 同 五百也

公儀ノ家先ハ但三ノ百也

一 知行取之五百不以上也 而トモ年在付十也

トシトモ知不中ハ也

一 兵足ノ者打二人ハ五百也 他ハ内府合衆ノ者

内府合衆ノ者伊本又其ハ拾也 兵足ノ者

一 浪五百也 是ハ浪屋中ノ性十三人トモ

全七也

一 銀拾八貫目 是ハ切米五石二匁人^{以下}三人有
金子五匁也

一 銀三貫五百匁 是ハ掃障坊之細工共以上也
九人^{以下}一人有金子五匁也

一 銀七拾四貫五百匁 是ハ是恒八百八匁人^{以下}
一人有金子五匁也

一 銀五貫七百二匁 是ハ是恒一人^{以下}一人
有金子五匁也

一 銀八貫七百六匁 是ハ是恒一人^{以下}一人
有金子五匁也

一 銀三拾貫目 是ハ是恒一人^{以下}一人
有金子五匁也

一 銀四貫四百四匁 是ハ是恒一人^{以下}一人
有金子五匁也

以上

一 今年二月至極丹後等之金附系之門石屋公席
中敷南之倉仕之別名捕られ南之倉仕之
史守仕より 役之係之子建斬最可仕之仕
左之奉仕仕之

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written vertically on the right page of the open book. It appears to be a formal or semi-formal communication, possibly related to the historical context of the document's origin.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written vertically on the left page of the open book. It appears to be a formal or semi-formal communication, possibly related to the historical context of the document's origin.

寛文六 同七

談海才二十

寛文六 丙午年

一今年六月十日性組大原主振正等惣組芝山保之春令
於淺草燒場打拵可仕旨以作共同月水燈園防書懸
増組榎江宗左衛門横地次郎左衛門夏是八春令斬罪可
仕旨以作共同為換役宗左衛門下牛也忠實の次郎左衛門
徳田左衛門下牛也内儀月付五人宛以是之同時在取
殿家来秋山利兵衛の小林次郎左衛門の内儀紋三以作共
旨彼内儀老徳田次郎左衛門老中其傳之
右之面之料之次書去月十日於淺草寺子鳴院信

右沙身整之上也也

一今年七月四日所之洪水之免

如虎

一今年七月豫呂如夜村多居城大倒甚為大凡多
下付大石高以迎入城之石垣百間社翁家申侍所
翁家氏全未在大破之也往之アリ依之他地柳毛
二付年五十年在侍信以作付与彼家来各世大和与宅

一此在信以傳之

一今年七月三日四日有述古依國是又甚為疾風付
二子女子在桑核田有之家敷台世形流乞一取七十三

一艘破損溺死之者幸二人井川除堤大破五石二十所也

一在之洪水舟内修理免居所土依細地形之天余

水上侍所有在之氏屋上之一面之水押流田細柳

七夥也

一因月十日土日土雷日十音又之去員大凡為田細柳

毛人子溺死之際浪より一物是付四日之台古依也

未便也之隣國人中中中

一今年七月三日四日在後國府内松平將監依地是

又後為烈風与家好五石形吹多之他依也

一今年七月十二日尾呂濃呂大角之田細柳之段

改考在也信也

一因共廿九日又甚多所川水如海
一在月川大水之日有翔舟本名川筋中坊水之
堤川陳破換教多之如虎

一与拾五万子三百五拾石

九子三百六拾石之濃昆欣

四万六千九百八拾石之所三三万石川不中

一六万七千八百七拾石大拾七永意

一堤破換所四万石九拾间余
但乃裡拾八里余内二子三
百石流昆欣之

一流家壳家二百四拾五新内二拾四新八濃昆欣

一板橋古橋共大小二千八百所流失中

一材木大小共五万在流失

一像之舟千溺死二人与四死

一在之船此十八日任事之所尾浪至流下在之

一竹筏尾浪教候也

七月十九日

一今年七月廿日作也

即之信宛

于信宛

由田子居尻大古書以
所之院南以内水性但其在自付
尻友所守行尻

七百儀宛

五百儀宛

四百儀宛

三百儀宛

二百儀宛

一百儀宛

沙知是以前宛新書以沙地事宛宛

沙知是以前宛新書以沙地事宛宛

沙知是以前宛新書以沙地事宛宛

沙知是以前宛新書以沙地事宛宛

沙知是以前宛新書以沙地事宛宛

沙知是以前宛新書以沙地事宛宛

右一箇之所前上七百儀宛科員一後少許可判

候約旨沙地之儀宛之別刻 入所

○沙子儀宛 此儀宛所奉行

但長儀在番中奉人扶持宛以下

長儀与力拾子儀宛人亦百三子石金世儀宛新

在儀宛又及儀宛

一今年七月以後宛沙地付如宛

光元

一沙百石

一三百石九百石

一子石二子石

一三子石四子石

一五子石九子石

右列各儀宛侍人人数

同此人数三人

同此人数五人

同此人数七人

同此人数九人

此教量之内取开意知切事云若也

右ノ通仕舞江中使還ノ旨下ニ在申ス是ノ
而疾チ不苦多ク一石也ニ後チ一石ノ全用ニ是ノ面
ニ申ス又ノ有限子限ノ物ナラズ也一他書ノ書
後人トシテ為別外者也

寛文六年七月十二日

一今年十一月 此作也此書付

云元

今年科作換毛之地在ニ以名標八本也昔在
届ケル迄酒造ニ依ルテ一系於大坂場ニ付其
酒ノ所ニ于外法亦在ニ所ニ一於而思ふ事

造米ノ公負數ニ所ニ法入法代者ノ改ニ申す
勿造下惣一ノ句簿新親ノ酒屋一切令停其
況亦所違有テ法入法代者軸者多ク其
密ニ一多造ニ一者ある所人ニ出ル一由穿聲
之上ニ不徒ハ此種取員ノ高下在ニ与急度
ニ長アリ一且又ある事トシテ板子ニ其作付彼酒屋
ニ以死罪者也

寛文二年十一月八日

一同年十一月廿八日

吉田長彦

尾井玄貞

本村道伯

海巴玄衣

井岡玄鏡

平賀玄純

久保玄貞

淺尾長次

中々玄朝

新井春彦

松本忠惠

坂本玄安

依多慶南

福山及安

日繁（男） 笠原玄泉

右以上玄衣人

朝九人（在江戶） 在所醫師（今日） 醫

而月見は紙付の

寛文七丁未年

一今年二月十日香月并之由礼相候と大層同於御

此御殿内務所蘭院人おび多人数御座候由月見

おんおめえ

一黒産砂之楊

一色産砂之楊

一十産砂之楊

一産青板之楊

一奥産砂之楊

一善産砂之楊

一大切のきん子楊

一小切のきん子楊

一け子平楊

一白綿細平楊

一白綿細さしや平楊

一きんごし由一連

一魚いしるむさるこし

一魚いしるむさるこし

一昇降島一ツ

一島羽三羽

一牛黄一袋（三斤入）

一ちんぬ一連

一阿めんとま一袋

以上九色（但毎年御初に持おゆ）

古系

古後

紀後

紀前

日向

薩摩

大隅

古後

對馬

筑前

筑後

給事候降之乃右國公兼
守左馬頭兼左近衛少輔

以上拾一ヶ回

井戸前右馬
吉山公左侍

但馬

丹波

石見

越前

加賀

越中

越前

越前

依後

以上九ヶ回

早稲及左近衛守
左馬頭左近衛少輔
神保守左馬

山城

大和

河内

摂津

和泉

紀伊

伊豫

土佐

讃岐

以上九ヶ回

川口源左侍
左近衛左近衛
八守左馬

右ノ面ノ以爲石沙降月支庭死比在處

馬本又左侍

白井八守左侍

左ノ面ノ以爲大坂九石降ノ浦ノ見分可仕分左侍

坂井八守左侍

伴 作平

右妻人坂我品而清之浦之凡分之仕告以作付且
取返之刻同船与二段御府之告以作清右之凡
清條目支通氣之打海之

一在し而之洋領物如危

坂之儀 川信孫也 坂分也 坂分也

井之到也 吉山也 松平也 中根也

神保也 智也 市橋也 佐永也

向井也 吉也 吉也

右行我賣金支給時板二羽減洋領之

溝之源也 川之源也 是形孫九郎也 又之儀

甲斐之儀也 福也 坂井也 伴 作平

右何我賣金二支給時板二羽減洋領之

一今年生二月以作也

元

坂之儀 坂之儀 坂之儀 坂之儀

陰陽也 磯原也 瓦也 清也

辻也 辻也 辻也 辻也

弓原也 土器也 石切也 放下

笠也 酒也 山也 吉也

菅原

墨原

国守

金堀

柳子森

笠作

侶保子

傾城

右通方交社由久存陳金匡代於相公涉是法
之御來京本吏源在室の頂戴之仕老之在亦及
のよの好多維在之是皆長吏之老之上多之分
け亦亦大工棒刺盜賊等長吏として可申之老
之湯屋風呂屋老之傾城之下付人形作等之
於之侶保子之下付^キ於作草細工越之膠也老
於之老皆之亦老之下多之老也

源氏任人卷系長 源氏史の耐頼系

右之とくは利利公涉清之上字と頂戴仕今度涉

朱市と云ふ、^{源氏史}相家老也

寛文七丁未年閏二月

政考右一社當時ノ上頼れハ、朱市ノ文ニ後新シ先極足、
方明セシト破スレモ不任心但本任宜シ

一今年壬二月罪科人共涉穿鑿之上或死刑或死
流或也故也作付公老也

秋田倉治信信

浪人 老也之信信

大工忠在室

大橋格三信

浪人 十次市房信信

右之博業と云ふ家業と云ふ、後在、所、所、所、所、
付之於、率、を、斬、罪、以、作、付

右方
尾十有八

浪人
官方法三條

右方人足又情更と少又右方と信
指右方本村原
法三條

源左衛門

右方今科子細不知評定所白物在之
右方一人豆良神付信之遺信は作付人但世取子出
一尾忠三信毎と返之

松前本村
徳利助三條 中ノ本法十郎

みうん三三條 七月の三三條 板也四三條

内所三三條 めのち三三條 かのち三三條

みち人三三條 尾三條 又市

右方一人情更と少又類之入尾等毎一柄とさし共
後江ノ原於大阪東海及日光乃中在之所之遊放
以作付

一今年壬二月本多尾信書是相組名同助方是日取願
中尾信同以男中尾又子二人情更打以付は右捕之
付時分信仲情更打九取守日あり合率也
搦捕之或ハ中分之是也款免未成幸合之共考今
取以逐世害醫之在通以作付之

一今年未三月廿九の夜法中世但大原之信正組控付
九右方本原庄三郎在方一人由青丹法書所外居也

夜中に在り人、老刀根を、
此石若儀は思ふに、
永井伊助等も、
付大小聖、
一今年三月上旬、
橋中、
一枚、
在、
何、
一今年四月廿九日、

一今年三月上旬、大坂川物、
橋中、
一枚、
在、
何、
一今年四月廿九日、

三

一今年三月、

一今年三月、

一今年三月、

一今年三月、

一今年三月、

一今年三月、

一今年三月、

四月

一今年三月、

吾妻記

了の社臣 神勅を蒙りて櫻くらひ日世人の尊賢
よりよの櫻くらひし夫神代の昔人皇のちり 免そ
り志くらひお歳とあはれに三子歳 このりてるを我朝
ともし聖人おれりひ神 聖の名は明不削 りして
使全 キ儀 之何し史を轉りし處もや賢人といふは神
明不削 の使を人よ不なとくとも 天下をなまき時
限て櫻くらひとくして天下にあり時のかひて四海と
平始しと風といふ とくし 臣と和するの又使
聖人よとあはれ とくし 今の人よ名付くはし

たのみの中のよき人を一をよ比し を比を
賢子比し ハ 暫く其名をかりんとあはれ ハ 可也然
とも も 人よと櫻くらひ 却る多り ハ 然れ ハ 近
人の言とあはれ ハ 今 ハ のよき事 ハ 人 ハ 人

四君子

君子ハ有徳ヲ立シテハ心所居シ
或ハ其ノ徳或ハ其ノ才ハあり

吾身作法正しく凡人の悦楽と不好と欲はして
仁義あり勇有く武備も不怠家用た不足
こと ハ 人 ハ 氏 ハ 徳 ハ 事 ハ 志 ハ 徳 ハ

松平翁を仰光政

自身の義守り古の君子も不可耻謙子徳
深く身子徳約を守り臣と扱ひ西形と全せん
り身一の切とせり

紀伊大御方御書

惣的はして古同を不耻恥人の善を取らざるの
量こ位及子を以せむ天下にみよ人十人とあづ
かす人生付て人この心深く徳高の氏とあ
安一そ兵他唯一人の仁義乃乃及み所也

阿蘇を信守忠秋

忠と考りして人の言をなめり不言すして信守あり

不活しして徳の多すありて思ふに
身家あり

○十卷

相馬長門守忠統

家中の徳侍子徳徳約を教ふ足ん事を部し
免る身の費を止て氏子取る可く他地の
仕金徳徳徳の族人も平及み取るを教ふ

佐科徳徳徳止之

等家よりして重人の事をぬり上と忠あり國よ
切あり

水戸宰相光圓

儒子と好人と世子たる者一家中在付て民安

久世大和智廣

生付て寛容ありていんかりかひ物あるべきを

りて意世と好く聖人の子と好く他の

子と不持

陸林伊三信

聖人の子と信一人の言と教ふ幽谷の言

本より出たり

松平日向守信

仁を尊くを欲して不後けのくは家中の風俗

より又申安

み味屋亮

士の守りて儒子と好く習志を中より代りて

教へて法者にして百姓の利をわたり一人の名を以て

家中の取次ありて故子信持なるくそのすむとの

向く怒りなきは徳教とてその百姓の善を尚平

を著せしめたるをその法の終下を著す

徳林信三

その好く徳を以て其の人を解む

阿部格奉り通定

其誠を身て終くまゝして無欲あり

板倉市正重太

凡神上層之故を嘗て文及も書とて自ら
信よりて面より不顯富て礼と好む事家詩待
の上存より可重入之

は邦日由國中より好人多存在しとて其平多の

まて佳り切用と不知權柄の便りも申して傳よ

所を祀をもりて

の十七悪

十七人の教のとりて其名とてさる事ハ教の改
めんとて是れ大衆の人の悪を隠し一善を揚ぎし由心
よきぬ考し善を隠れは善夫之悪の隠をよき事にて
徒て改し流るる悔をむ吾人は成りき人ある人は情
なき悪の各を顯し世に廣むる事ハ不仁の事也其上
善の人のつと所の十善の中ハ又此は下文明徳行なり又十七悪の
教よある人よある悪人あり不改ハ死後よ悪
名不て通存の中らありし所の十七悪の中より十
人並の人をて家に降くとりて誰と不之の
悪の悪をかくさんぬ也

一由世當代不位伝事の内道急下たりの事なり何之就
史の原也

不審事

一河代長久之治中にて上洛無しより河内道
慮ぞ也

一江ノ大坂焼失に雷火以後伊天守不仕成り
いつあるの内道急下也

一京都の所司代牧神依海軍八方の軍保の御法
しよと付、病者不ぬるを以て四年由用向持の事
代の存不仕付りいつある内道急下也

一近年酒井長門守一柳監物宗相丹後守事百姓
せよとあり候中と困窮せし法より仕全悪病は成
易に修符ひと心をなれたる方左也と更りて述
安穩子と云々全漸く唯今内関也一とあり候事
いつある内道急下也

一云依の金浪平海江の事をくた巻中流の事
いつある内道急下也

在道急不審以上五條也

一和奇也

是の内卷中保科紀信を収めよと一和
奇ともあり

いつある内道急下候事とあり

質チノの推量チノなるの正後梅苑と云はは味アキもあ
 大きぬるまゝのぬるは紙の障子あんとする斗チあり
 味もつきまゝぬ大和栲志チの用ひぬるまゝの
 但るなる心チぬくまゝの梅のかみぬけてこゝろが
 ぬよりの筋チときけがまゝの句チ見ればやまの信
（その信種犯名とのりも）
 上のゆゑのちひこころの花チやせんチのまゝふつ不チ信物チ
 以上
 一今年二月堀田徳中書正後上良安申下所習と
 作付是七水地佐法書乱心して彼使比と云上
 一の致あり

一今年十二月百室樹院殿十七回忌は遊芸し法
 事在し因縁年未流最遊放同門チ義チと云外チ作
 傍信チ寺は教免と作付所謂（此は）同事（は）何と云はぬせん（は）
 一牧野の信子と云ははる依信チと云と云と云
 一少門殿左の因文左是けあ人チと云
 一多尾尾久左の因四序左是けあ人同門チ免
 一堀田市序左因去年右あ人遠信チ免
 一酒井良平左免
 一秋田安房左下河外左近山左左免
 一内倉左左河外左相田少信左免

一 寺 卷 院 傳 五 流 罪 涉 免
 一 松 年 名 尸 在 楠 山 涉 免 文 精 涉 免 智 恩 院 所 化 之
 一 黑 田 市 正 涉 免 文 正 涉 免
 一 龜 井 經 光 涉 免 良 仙 涉 免
 一 仙 音 教 轉 免 下 定 去 存 免 堯 子 堯 免
 一 以 七 人 追 放 涉 免
 一 曹 洞 宗 祿 方 誌 出 家
 一 賀 品 天 德 院 隆 心 丹 呂 瑞 岩 寺 國 學 子 入
 一 大 宗 亦 寺 子 齋 堂 懶 淨 所 虎
 一 長 劇 寺 因 損 廣 岳 院 剛 宗

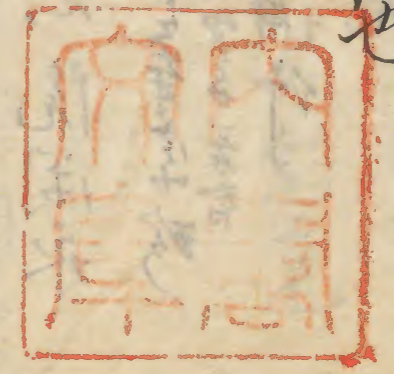
久 松 寺 牙 子 文 怒 賢 宗 寺 元 觀
 少 全 廣 德 寺 良 忠 天 德 寺 隱 后 利 天
 信 呂 東 芝 寺 重 水 鐘 林 春 呂 寺 中 臣
 棟 橋 海 壽 院 大 樹 積 山 東 照 院 剛 永
 信 呂 長 谷 寺 祖 宣 濃 呂 本 寺 宗 珍
 信 呂 海 龜 院 牙 子 堀 札 志 光 寺 浦 行
 金 正 寺 五 秀 以 多 何 義 國 涉 免
 江 戶 大 宗 亦 寺 雲 院 江 戶 天 德 院 隆 元
 江 戶 海 壽 寺 洞 雲 宇 傳 文 永 林 寺 雄 三
 鐘 林 西 岸 院 元 貞 鐘 呂 西 間 院 胡 良

江戶傳昌寺傳益
住長海意院云云

江戶湖雲寺胡乃

以分雖為伊教免一内痛死也

池田大庵寺永順
弓法具重与万安
江戶松久寺牛怒



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

[The left page of the book is mostly blank with some texture and minor marks.]

